

聖書箇所：ルカの福音書 10 章 38～42 節

説教題：どうしても必要なこと

この箇所はしばしばとりあげられ、こんな結論で締めくくられることが多かったと思います。「マリヤはみことばを聞く方を選び、イエスからほめられました。私たちもマリヤのようにみことばを聞く者となりましょう。」確かにそのとおりなのですが、今ひとつ納得できない思いが私の中にくすぶっていました。というのは、家にお客さんを迎えるというとき、マルタのように食事の準備をするのが普通です。イエスの話を聞くのも大切かもしれないけれど、それは食事の後でもできます。家の中がごった返しているのがわかっていて何も手伝いもしない。これはマルタが怒るのは当たり前。マリヤはよっぽどどうかしていると言いたくなるような場面なのです。マリヤは周りのことに配慮することができない鈍感な人だったのか。そうでないというするなら、イエスはいったい何をここで言おうとしているのか。これから見て参ります。

1 イエスを迎えるマルタとマリヤ

マルタは近くまでやって来たイエスを喜んで家に迎えようとしていました。今では珍しいことかもしれませんが、田舎では結婚式とか葬式、あるいはお祝い事などがあると自分の家でやるのが当たり前でした。その食事の準備のため、朝早くから近所の人が手伝いに来ました。おそらくマルタの家でもそんな状態だったのでしょう。

ところが、妹のマリヤ何も手伝いもせず、

主の足もとにすわって、みことばに聞き入っていたというのです。それもイエスが家の中に入られたときから、ずっとです。これではマルタでなくとも声を荒げたくになります。

マルタはイエスに対してこう訴えます。「主よ。妹が私だけにおもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのでしょうか。私の手伝いをするように、妹におっしゃってください。」

よく考えると不思議です。なぜマリヤに向かって直接言わないのでイエスに訴えるのでしょうか。マルタの心の中にあるものが見えてきます。マルタが訴えたいことは、マリヤが何も手伝わないという不満のこともあるのですが、もう一つ別の怒りがあります。マルタのこぼれを縮めればこうなります。「主よ。何ともお思いにならないのでしょうか。」マルタはマリヤのことだけではなく、イエスに対しても怒りを覚えているのです。マルタだってマリヤのようにしたかったのかもしれませんが。でも姉として台所を取り仕切る責任があるのでそれはできない。マルタの目には、マリヤがイエスを独り占めしていることがねたましく感じられたのではないのでしょうか。

さきほどまでは、喜んでイエスを自分の家に迎えたマルタでした。しかし、だれでもそうですが目の前が忙しくなると心の余裕を失っていきます。自分が迎えたお客であるイエスに対してさえ不満を口にしてしまうのです。そんなマルタに対して主はどのように

応答されたか。それはまた後で見参ります。

2 マリヤ

(1) 主の足もとにすわって

その前にマリヤのことを確認しておきます。39節。「彼女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、みことばに聞き入っていた。」

マリヤがしていたことは二つです。一つは、主の足もとにすわっていた。もう一つは、みことばに聞き入っていた。

まず「主の足もとにすわって」というところから見ていきます。何となく読み過ぎてしまいがちな聖書のことばです。でも聖書には無駄なことばは一つもありません。「主の足もとにすわる」というところにも大切な意味があります。

昔、道路が今の時代のようにきれいに舗装されていたわけではありません。外を歩けば当然足は汚れます。テレビや映画でやる日本の時代劇で、ときどき宿屋に泊まる人の場面があります。旅行者が宿屋の玄関に入って腰を下ろすと、すかさず女中が手に水かお湯の入った桶を手にしてお客の足を洗います。

聖書の世界でもまったく同じです。どんなにきれいに洗っても、「足」は汚れた部分なのです。マリヤがイエスの足もとにすわった理由がそこにあります。マリヤは自分が汚れた者であると感じています。それが「主の足もとにすわって」という意味になります。

(2) みことばを聞いていた

次に「みことばに聞き入っていた」を見ます。聖書はイエスがこの時マリヤに何を語っていたのかは記していません。ただ状況からわかることがあります。マリヤだって手伝わ

なければならぬことはわかっているのです。でもどうしてもできません。なぜでしょう。イエスが衝撃的なメッセージを語っているからです。どんなメッセージであったのかは最後に触れます。

この箇所を読むと、マルタは姉御肌で一生懸命立ち働いてきばきした性格。一方マリヤはぼんやり屋さんで気がつかない性格。そんなふうにならぬ色分けをしがちですが、それではちょっとマリヤがかわいそうです。マリヤは、のちに高価な香油をイエスの頭に注ぎ、髪の毛でイエスの足をぬぐうということをします。何も考えていなかったのならそんなことはしません。深く心を動かされ、考えさせられています。ぼんやり屋さんなどではなく、むしろ霊的に繊細な感受性を持っている女性だと考えられます。

3 マルタとマリヤを迎えるイエス

(1) 「マルタ、マルタ」

マルタがイエスに対して不満をぶつけたとき、イエスは、「マルタ、マルタ」とマルタの名を二度呼びます。この二度という回数重要です。聖書の中で名前を二度呼ばれた人はそう多くはありません。例えば、アブラハム。彼が自分のひとり子であるイサクを刀を振り上げてほふろうとする瞬間、神は「アブラハム、アブラハム」と呼び、アブラハムを止める場面が創世記にあります。また、モーセが羊を飼っていたときにシナイ山で神から召し出される時、「モーセ、モーセ」と呼ばれています。

いずれも神が名前を二度呼ぶのは、かなり緊急性が高かったり、非常に重要な用件を語ろうとするようなときに限られているのです。そうしますと、イエスが「マルタ、マル

タ」と名前を二度呼んだのは、私たちが思っている以上に何か重要なことがここで行われていたことを現している考えなければなりません。

(2) どうしても必要なこと

いったいどんな重要なことがあったのか、この箇所のだこにも直接の手がかりとなる説明はありません。しかし間接的な手がかりはいくつかります。41, 42 節。「主は答えて言われた。「マルタ、マルタ。あなたはいろいろなことを心配して、気を使っています。しかし、どうしても必要なことはわずかです。いや、一つだけです。マリヤはその良いほうを選んだのです。彼女からそれを取り上げてはいけません。」

イエスがマリヤのことを高く持ち上げ、もういっぽうのマルタのことは低い評価を下しているわけではありません。イエスは、マルタの気持ちもよく理解しています。マルタのことを否定しているのではなく、マルタがあまりにも多くのことに気を使いすぎていることを心配しているのです。

これはマルタだけではありません。私たちもそうです。自分で自分のことが意外にわかりません。ほかの人から見ると、「そこまで心配事を抱え込まなくても良いのに」と思うことがしばしばあります。でも本人は真剣に悩んでいて、しきりに「苦しい」とか「つらい」ということばを口にします。

私たちは、実はあまり必要ではない悩みを抱え込みすぎているのかもしれませんが。イエスは言われます。「どうしても必要なことはわずかです。いや、一つだけです。」生きていくためには心配しなければならぬことがたくさんある。私たちはこう思ってきまし

た。しかしイエスは、必要なことはたった一つだけだと言われます。

(3) マリヤが選んだこと

いったいそれは何なのか。マリヤはその良いほうを選んだというけれど、いったい何なのか。そのことを最後に触れていきます。

マリヤは自分が汚れた者であることを自覚していました。だからわざわざイエスの足もとにすわりました。汚れとは言い換えれば罪の自覚です。具体的なことはわからないのですが、マリヤは長い間そのことで苦しんできました。だからもしかしてマルタが自分の家にイエスを迎えるのだと言いだしたとき、戸惑ったのかもしれませんが。自分のような者がいる家にイエスを迎えてよいのだろうか。

マルタは、マリヤのそんな戸惑いには気がつかず、イエスを家に喜んで迎えようとしていました。でも、それは正しい言い方でしょうか。イエスは神なのです。神である方を人間の考えで自分の家にお招きすることなど本当はできないことです。イエスがマルタとマリヤに会おうと決心され、イエスが家を訪ねていった。それが正しい言い方になります。

それだけではありません。マルタはイエスを自分の家に迎えるために心配し、気を使いました。イエスはどうされたのでしょうか。イエスはこの二人を天の御国に迎えようとしているのです。マルタはその事にまだ気がつきません。けれどもマリヤは気がつきました。自分のような者でさえ、この方は天の御国に招いてくださる。その事を知ったとき、驚きました。だからマリヤはその場から動くことができないのです。この方が罪人である私をどれほどに愛してくださっているのかを知ったとき、他のことはもう何も目に入らな

くなりました。

「マリヤはその良いほうを選んだのです。彼女からそれを取り上げてはいけません。」
天に招かれるかどうかは私たちが選べることではありません。でも主は言われるのです。
「あなたは良いほうを選んだ。」そしてこうも言われる。「あなたが選んだ良いものは、あなたから決して取り上げられることはない。」

私たちは何気なくこのように言うことがあります。「主を私のところにお迎えしよう。」けれどもそれは逆でした。主が私たちを招いてくださっている。主をお招きするために、マルタはいろいろな気遣いをしました。私たちも同じです。あれをしなければ、これをしなければ。と気を使います。

でも主は私たちを招くために、何をしてくださいましたか。ただ一つです。ご自分のからだを十字架においてささげてくださいました。「どうしても必要なことは一つです。」このみことばは、マルタとマリヤのことだけを語ったものではありません。主ご自身のことについてもそのままあてはまります。主が十字架で死なれる。主は、それはどうしても必要なことなのだと宣言されます。

マリヤをとらえて放さなかったイエスのみことば。私たちもみことばにとらえられていきたいと願います。